「ピアノ製造アーカイブに関する研究」報告－浜松地域における中小ピアノ製造業者の展開と「楽器・ピアノの街」の情報発信

The report of investigation on piano production archive — Development and decline of the small and medium size piano manufacturers in Hamamatsu area,public communication about "the city of musical instrument particularly the piano" —

冨田　晋司
文化・芸術研究センター

Shinji TOMITA
Art and Culture Research Center

本研究は浜松地域における楽器産業、特にピアノ製造の歴史を概観し、戦後のピアノ需要拡大期に急速に増加し、需要のピークアウト後は急激にその数を減らした中小ピアノ製造業者に焦点を当て、その歴史的な位置づけ及び役割を明らかにするものである。現在ではヤマハとカワイの二大メーカーを除く中小ピアノ製造業者はほとんどピアノ生産を行っていない状況となっているが、1950 年代から 1960 年代にかけては、浜松地域に数多くの製造業者が存在し、様々なブランドでピアノを製造していた時期があった。本稿ではその発展と衰退の経緯を明らかにするとともに、楽器の街であり、とりわけピアノの街である浜松の産業文化の魅力をどのように発信していくのかを考察する。

This study surveys the history of musical instrument industry particularly the piano production in Hamamatsu area. It is to focus to the small and medium size piano manufacturers who experienced rapid development and decline in the period of postwar.

It is in a situation that most of the small and medium size piano manufacturers except two major piano makers (Yamaha and Kawai) do not product the piano now, but, over the 1950s through the 1960s, many manufacturers existed in this area, and there was the time when it produced pianos with various brands.

I clarify process of the development and decline of small and medium size piano manufacturers in this report and consider it how to communicate about industrial culture of Hamamatsu that is the city of the musical instrument particularly the piano.

1. はじめに

1-1. 研究の目的

ヤマハ株式会社（以下ヤマハ）と株式会社河合楽器製作所（以下カワイ）は日本を代表する楽器メーカーであり、YAMAHA、KAWAI はともに日本が世界に誇るピアノ・ブランドである。この二大ピアノメーカーの本社が立地し、1 世紀以上に渡る楽器製造の歴史を有する浜松地域 [1] には、かつて二大メーカー以外に 30 以上の中小ピアノ製造業者が存在し、50 以上の「浜松製ブランド」のピアノが生みだされていた。

本研究は浜松に立地する大学として、当地の代表的な地域産業である楽器産業に関わる研究蓄積を目的として、浜松地域の中小ピアノ製造業に注目し、その歴史と現状を調査するとともに、現在も製造を継続している製造業者については、「ピアノ工房の記録」（アーカイブ）を蓄積すべく、ピアノ職人の仕事、製造過程、製品についての記録法の検討及び研究成果と記録資料の公開方法などについて研究を行うものである。尚、このプロジェクトは 2013 年度も継続しており、本稿はその中間報告として位置付けられる。

1-2. 研究の方法

本研究は単に中小ピアノ製造業に関わる資料のアーカイブ化にとどまらず、楽器産業に関わる研究の蓄積と研究成果及び記録資料の公開を企図して、下記の方法により研究を進めた。

(1) 日本及び浜松地域の楽器産業史、特にピアノ製造の歴史を概観する中で、中小ピアノ製造業の歴史的な位置付け及び楽器産業における浜松地域の特性を明確化する。
(2) 文献資料等に基づき、過去から現在に至るピアノ製造業者とピアノ・ブランドを整理する。
(3) 浜松地域のピアノ製造業の変遷を知る関係者に対してヒアリング調査を行う。
(4) 現存する中小ピアノ製造業者を訪問調査し、ピアノ作りの作業現場に関わるデータを蓄積する。
(5) 今回の研究や他の関連研究によって蓄積されたデータ、資料等の効果的な公開方法を検討する。

1-3. 本研究報告について

本稿は 2012 年 10 月 20 日、21 日の両日、本学及び浜松市内の数会場で開催された鍵盤楽器をテーマとする音楽祭とシンポジウム「バンバン！ケンバン♪はままつ」（主催：静岡文化芸術大学）における筆者自身の報告内容に加筆したものである。

2. 中小ピアノ製造業に関わる先行研究及び現存する中小ピアノ製造業者について

浜松地域の楽器産業研究の分野で顕著な業績を残している大野木吉兵衛によれば、1957 年 12 月の調査で浜松地域に立地するピアノ製造所は二大メーカーを除いても 36 社に及び、確認されるブランドは 58 を数える（大野木 1977、表 1）。大野木は 1950 年代から顕著に増加した中小ピアノ製造業のその後の展開について、「彼等の多くは、やがて景気の浮沈にもまれ、（昭和）40 年代中頃までに、先発の中小業者の一部と連れ立って息切れしてしまう」（（　）内筆者補筆、大野木 1977）と述べている。

＜表１＞　静岡県のピアノ製造所とブランド（除：カワイ・ヤマハ）　　1957 年 12 月調査

No.	地区	ピアノ製造所	ブランド数	ブランド				
1	浜松駅北部	東洋ピアノ製造	1	アポロ				
2	浜松駅北部	浜松楽器工業	1	ディアパソン				
3	浜松駅北部	タイガー楽器製造	2	タイガー	ゼンオン			
4	浜松駅北部	沢根ピアノ製作所	1	モナーク				
5	浜松駅北部	小野ピアノ製作所	3	スピルマン	バックハウス	シトラウス		
6	浜松駅北部	松山ピアノ製作所	1	ナオンジム				
7	浜松駅北部	精宏舎ピアノ製作所	1	セイコウ				
8	浜松駅南	大和楽器製造	2	レスター	ヤマト			
9	浜松駅南	平和楽器製造	1	スタインバッハ				
10	浜松駅南	遠州ピアノ製造	2	ラ・ルーナ	スタインマイヤー			
11	浜松駅南	大洋楽器製造	2	ブルックナー	イーグリーク			
12	浜松駅南	東亜楽器製造	1	ドルファー				
13	浜松駅南	明音楽器工芸社	1	フーゲル				
14	浜松駅南	日米楽器工業所	3	スタンダード	ノーベル	アトラス		
15	浜松駅南	光輪楽器製作所	1	ブルーベル				
16	浜松駅南	坂本ピアノ製作所	1	ブルーゲル				
17	浜松駅南	日産楽器製造	5	ウェルバー	スタインバーグ	スタインメル	ケー・ヘルマン	タカラ・ヤマト
18	浜松駅東・天竜川	天竜楽器製造	3	エテルナ	カイザー	ローズ		
19	浜松駅東・天竜川	ドレスデンピアノ	2	ラ・ザール	ウィルヘルム			
20	浜松駅東・天竜川	中部楽器製造	3	フローベル	エマーソン	エレガント		
21	浜松駅東・天竜川	三陽楽器製作所	1	ケーニッヒ				
22	浜松駅東・天竜川	スワン楽器製造	1	ガーシュイン				
23	浜松駅東・天竜川	三葉楽器製造	1	スタインリッヒ				
24	浜松駅東・天竜川	富士楽器製造	1	ベルトーン				
25	浜松駅東・天竜川	浜名楽器製造	3	バーベル	ロードリッヒ	フリードリッヒ		
26	浜松駅東・天竜川	クロイツェルピアノ	2	クロイツェル	ムーンライト			
27	浜松駅東・天竜川	ベルリンピアノ製作所	1	ローゼン				
28	浜松駅東・天竜川	興和楽器製作所	2	クリーベル	ホフマン			
29	浜松駅東・天竜川	フローラピアノ製作所	1	セレザーク				
30	天竜川東	ヘルマンピアノ製造	1	ヘルマン				
31	天竜川東	ワールドピース製作所	1	ワールドピース				
32	天竜川東	斎藤ピアノ製作所	1	ルビンシュタイン				
33	天竜川東	日本ピアノ製造	2	シュミット	オノ			
34	天竜川東	山下ピアノ製作所	1	モンソン				
35	天竜川東	久保田楽器製造	1	ジュリアス				
36	天竜川東	静岡楽器製造	1	フリードリッヒ				
		合計	58					

大野木吉兵衛「浜松における洋楽器産業」、『遠州産業文化史』，1977 より　筆者補筆

大野木論文の約 20 年後、阿部聖は浜松の中小ピアノ製造業者について「浜松の中小メーカーは、とくに 1980 年代中頃を境に急速にその数を減らした」として、1996 年４月１日現在の浜松地域における中小ピアノ製造業者の数を静岡県楽器製造協会の加盟に基づき、９社としている（阿部 1997）。

尚、本研究の中で行ったピアノ製造業者に対するヒアリング調査により、現在、二大メーカー以外に独自のブランドでピアノを製造販売している中小業者は下記の４社である。（表２）

＜表２＞　浜松地域のピアノ製造業者（2013 年現在、ヤマハ、カワイを除く）

製造業者名	所在地	ブランド	現状
東洋ピアノ製造	磐田市高木（本社工場）	アポロなど	海外生産　本社工場では仕上・調整を行う
エスピー楽器製作所	磐田市豊田	シュベスター	注文生産のみ　通常は修理・再生中心
シュバイツァ技研	磐田市大原	シュバイツァ	注文生産のみ　通常は修理・再生中心
クロイツェルピアノ	浜松市中区城北	クロイツェル	注文生産のみ　通常は修理・再生中心

※「写真資料」として末尾にエスピー楽器製作所、シュバイツァ技研の写真を掲載した。（写真資料 1、2）

このうち東洋ピアノ製造はピアノの生産は専ら海外にて行い、本社工場（磐田市）では仕上・調整のみを行っている。残り３社は浜松市内、磐田市内のピアノ工房において注文に応じて生産するが、生産台数は年間数台以下（非常に少ない）で、中古ピアノの修理・再生が主な仕事となっている。

3. 楽器産業史概観～「楽器の街」の形成と中小ピアノ製造業者

3-1. 浜松地域におけるピアノ製造

(1) 山葉寅楠による楽器産業の創成と発展

浜松地域の楽器製造は 1887 年（明治 20 年）に浜松滞在中の医療器械修理の渡り職人・山葉寅楠（現在の和歌山県出身、1851 ～ 1916）が当地の小学校（現在の浜松市立元城小学校）所有のメーソン・アンド・ハムリン社製リードオルガンを修理したことを切掛とし

て始まっている[2)]。山葉は 1889 年（明治 22 年）、浜松・成子の普代寺庫裡跡[3)]に山葉風琴製造所を設立、オルガン作りでは先行していた横浜の西川風琴製造所[4)]との製造販売競争を展開しながら、日本楽器製造株式会社[5)]が設立される明治 30 年（1897 年）頃までには年平均で 500 台以上のオルガンを量産するまでになる。

1899 年（明治 32 年）、山葉は文部省の「斯業技術視察者」として渡米、約 5 か月間にわたり当時アメリカのピアノ製造の中心地であったニューヨークなどで工場を視察した。アメリカからピアノの現物や部品、工作機械、工具などを買い込み帰国した山葉は、ピアノ部長に山葉直吉、ピアノ製造技術開発の担当には当時若干 14 歳の河合小市を配し、ピアノ製造に着手する。

ヤマハにより国産ピアノの第 1 号（アップライトピアノ）が完成したのは 1900 年（明治 33 年）1 月のことである。ピアノの主要部品である鋳物製フレーム、アクション、鍵盤などは山葉がアメリカで買い込んだ輸入品であったが、音質、音色のポイントとなる響版は自社製で、響版が国産故に、国産第 1 号と認められている。1903 年（明治 36 年）からはグランドピアノの製造も始まり、販売台数の伸び悩みや効率的な生産技術の確立に苦労しながらも、明治後期から末期にかけてピアノ生産台数は表 3 の通り推移している。

＜表 3 ＞　日本楽器製造　ピアノ生産推移

年	生産台数	備考
1900	2	
1901	6	
1902	8	
1903	21	
1904	37	
1905	63	
1906	90	
1907	117	103 という統計値もあり
1908	441	
1909	267	
1910	438	
1911	501	

※ 1900 ～ 1907 は山葉直吉氏手帖記録、
　1908 ～ 1911 は『浜名郡誌』の数値
（大野木 1977 より）

3-2. 労働争議と経営の近代化、スピンアウト者の独立

山葉寅楠は 1916 年（大正 5 年）逝去し、後任社長には官僚でそれまで浜名郡長を務めていた天野千代丸が就任した（1917 年）。大正年間、ヤマハのピアノ生産は順調に推移し、1925 年（大正 14 年）には年産 1000 台を超えるに至ったが、1926 年（大正 15 年）、天野の事業拡大路線への反発及び大量解雇[6)]への抗議などに起因する大争議が発生し、1927 年（昭和 2 年）には川上嘉一が社長に就任している。川上は浜松の出身、東京帝大卒業後東京瓦斯、住友電線等に勤務していたエリート技術者で、社長就任後迅速に企業組織の改革、合理化、経営の近代化に取り組む。

大正末期から昭和初期にかけての労働争議、経営者交替、経営合理化・近代化の推進は結果的にその後のヤマハ発展の基礎を築くものとなったが、一方で創業以来、ピアノ製造の第一線に立ち、事業を牽引してきた技術者たちのスピンアウトを招くこととなった。河合小市（河合楽器製作所創業）、山葉直吉（山葉ピアノ研究所創業、1929 より「n yamaha」ブランドのピアノを製造）、大橋幡岩（戦後、大橋ピアノ研究所創業）らピアノ作りに秀でた優秀な技術者はヤマハの組織を離れ、ヤマハで磨いた技術をさらに高めつつ独自の道を歩み始める。大争議とそれに続く経営の近代化は浜松地域においてスピンアウト技術者による小規模なピアノメーカーを生む契機となり、「大メーカーからの技術者のスピンアウト・独立開業」の動きは戦後においても継続され、多くの中小ピアノ製造業者の創業へと繋がって行く。

3-3. 戦後ピアノ産業の発展～川上源一と河合滋による経営改革

楽器製造の他、様々な工場が集積していた浜松は戦時中、激しい空襲に襲われ、市街地の住宅や工場の殆どが灰燼に帰した。楽器工場も例外ではなく、ヤマハ、カワイの本社工場も焼失している。戦後の楽器製造業は「まず木工場として復活し、次第に着手しやすい小型の楽器から復興し始めた」（大野木 1977）。最も「大型」で部品点数も多いピアノの生産復活はヤマハが 1947 年、カワイは 1948 年である。

戦後の復活と共にヤマハには川上源一、カワイには河合滋と、それぞれ戦後の躍進の時代を牽引する新進の経営者が登場し、浜松地域の楽器産業は新たな展開を見せて行く。大野木はこの楽器業界の「新しい経営者の時代」の始まりを「業界は、復興より躍進へとうねり始めていた。その行く手には、ともに剛毅な両新鋭の対決によって、新しい風雲が孕まれずにはいなかった」と表現している（大野木 1977）。大野木の表現は少々「文学的」であるが、平和な時代の到来とともにピアノの生産と販売市場の双方に新たな展開が始まり、国内市場の著しい拡大、さらには日本のピアノが世界を席巻する時代へと移っていく。

3-4. 日本のピアノ産業の急速な発展

山葉寅楠・ヤマハによって初の国産ピアノが浜松で作られてから半世紀以上の歳月が経ち、日本のピアノ製作は大きな発展期を迎えていた。下記の表 4 は 1870 年から 1980 年の 110 年間の各国別ピアノ生産の推定台数を示したものであるが、日本のピアノ生産が 1960 年頃から急速に拡大し、1970 年の段階では既に世界のトップの生産量となっていることがわかる。

＜表 4 ＞ 1870 ～ 1980 年の世界のピアノ生産台数（推定）

（単位：千台）

年	英国	フランス	ドイツ	アメリカ	日本	ロシア	韓国
1870	25	21	15	24			
1890	50	20	70	72			
1910	75	25	120	370		10	
1930	50	20	20	120	2		
1935	55	20	4	61	4		
1960	19	2	26	160	48	88	6
1970	17	1	45	220	273	200	81
1980	16	3	59	248	374	166	

1960 以降の独は東西合計
出所：The New Grove Dictionary of Musical Instruments
　　（阿部 1997）

日本がピアノ生産のトップ国となったことについては供給側、需要側それぞれに以下のような背景があると考察される。無論、他の個別市場と同様、国内のピアノ市場においても需要と供給は別々に存在するものではなく、「需要が見込めるが故にそれに見合う供給をする」、「需要に応えるだけの供給力がある」という需給の相互関係が強く働いていることは言うまでもない。

(1) 供給サイド

①上記 3-3 で述べたようにヤマハ、カワイともに新たな経営者を迎え、技術開発、生産管理、組織マネジメントなど経営のあらゆる面において更なる近代化、合理化が図られた。生産はライン化され、戦前期までにはなかった大規模工場でピアノが作られるようになり、世界に先駆ける形で「工業製品としてのピアノ」を大量生産することが可能となった。特に木材の人工乾燥技術は、自然乾燥を基本とするヨーロッパのピアノ製造とは大きく異なるものである。乾燥工程の人工化は工程全体の時間短縮に直結し、生産の合理化に大きく寄与した。工業製品としてのピアノ作りはまさにヤマハ、カワイの二大メーカーが競う浜松から生まれたものであり、ピアノ作りにおける「浜松型生産方式」ともいえるほどのユニークな特徴である。

②経済大国を築き上げた日本のモノづくりの最大の特徴は「大量生産しても品質を落とさない」ことである。自動車や家電製品同様、ピアノ生産においても厳密な生産管理と品質管理が徹底され、均質性の高い（消費者にとっては安心感の高い）ピアノが製作された。しかも工業製品としてのピアノはコストダウンが図られ、比較的低価格のピアノが数多く供給されたことにより、世界のピアノ市場でも大きな競争力を持つことができた。

(2) 需要サイド

①日本経済は 1955 年（昭和 30 年）頃からいわゆる高度経済成長期に入ったが、高度経済成長は働く者の雇用面での構造転換をもたらす。終身雇用、年功制賃金などの導入が社会全体に拡大し、労働者の雇用の安定と所得水準の向上が図られた。雇用の安定と所得の向上は消費の拡大へと繋がり、大量生産のコストダウン効果もあって一般の消費者にとっては「手の届かない高級品」であったピアノの購入が視野に入るようになった。

②雇用の安定、所得の向上とともにこの時期に確認すべきピアノ市場拡大の条件は住宅事情の改善である。戦災により国内の多くの主要都市は焼け野原の状態となり、住宅不足は極めて深刻で、「バラック」と呼ばれる簡易式の住宅を数多く建設することで、急場をしのいだが、戦後 10 年以上が経過し、鉄筋コンクリート製の集合住宅や本格的な木造住宅の建設が進むなど、この時期から徐々に住宅事情の改善がみられるようになる。一般家庭で購入されるピアノはアップライト型が普通だが、それでも大型で重量のあるピアノはバラックのような簡易式住宅では置くことが難しい。

③ヤマハは 1954 年（昭和 29 年）、カワイは 1956 年（昭和 31 年）にそれぞれ「音楽教室」を開設している。音楽教室の普及により、子供が「ピアノを習うこと」が特別なことではなくなり、一般家庭へのピアノの普及を後押しした。ピアノを習う子供の増大はピアノの需要に直結するため、音楽教室の拡大は極めて効率的な販売戦略となった。

④この時期、ヤマハは特約店、カワイは直販店のネットワークが拡大し、販売体制が整えられたことによって、消費者の「買いやすさ」が格段に向上した。また購入方法についてもカワイは 1960 年（昭和 35 年）から「月掛予約制度」を新たに始めている。この制度は毎月一定額の積み立てによって前払いを行い、数年後には定価よりも割安でピアノが購入できるという仕組みである。消費者にとっては毎月一定の積み立てによってピアノの購入が可能となり、メーカーにとっては計画的な生産、資金運用ができるという双方にメリットがあったため、この制度は急速に広がった。勿論「毎月一定額の積み立て」を担保する雇用・所得の安定が普及していく時代ならではの仕組みということがいえる。

4. ピアノ産業発展期における中小ピアノ製造業者の展開

4-1. 中小ピアノ製造業者の数

以上述べたとおり、戦後の高度経済成長期、供給、需要双方に出現した要因が好循環に繋がり、浜松にはヤマハ、カワイの二大メーカーを軸とする楽器の街が形成されたが、ピアノ市場が急速に拡大する中、1950 年代半ば頃から、ヤマハ、カワイ以外の中小のピアノ製造業者も急速に増加した。2 で掲げた大野木作成のピアノ製造所とブランドの資料は 1957 年 12 月時点のものである（大野木 1977）。しかしながら中小ピアノ製造業者は大野木論文掲載の表に限るものではなく、ピアノ製造業者とピアノ・ブランドはそれぞれ膨大な数に上る。

これまで国内でいくつのピアノ・ブランドが生まれ、それはどのような製造業者によって製作されていたのか、そのうちいくつが浜松のものなのか。製造業者とブランドの数が膨大なため、数字の正確な確定は困難な作業であるが、今回の研究の中でピアノ・ブランドの資料を整理したところ、ヤマハ、カワイを含むピアノ・ブランドとピアノ製造業者の組み合わせ [7] は 372 に及び、その内約半数近い 175（47.0%）が浜松のものと推定される。

4-2. 中小ピアノ製造業者の経営者と事業状況

中小のピアノ製造業者は既に戦前においてもいくつか確認される。大野木論文には戦前の中小製造業者として「千代田」「遠州」「富士」「浜松」「三葉」の 5 社が「戦前の黄金時代を飾った」としているが、これら業者の経営者、技術者はほぼヤマハ、カワイからのスピンアウト組で占められている。また大正末期から昭和初期にかけて東京の大森･蒲田地区に東京楽器研究所、蒲田、三共、協信社、小野、広田などのピアノ製造業者が事業展開をしていたことがわかっている（大野木 1977）。二大メーカー以外の中小製造業者は浜松及び大森・蒲田地区の二つの地区に集積していたことがわかる。

戦後高度経済成長期に顕著な拡大をみせた中小製造業者であるが、その多くはやはりヤマハ、カワイからのスピンアウト者であり、浜松地域には楽器関連産業の集積によって独立自営が可能な環境が整えられていた。大野木は「ピアノ製造は、部品メーカーと製品取引商の支援によって手軽に開業できる地盤が整うに従い、腕自慢の一匹狼達が自らを試す恰好の舞台となった」と指摘する（大野木 1977）。また阿部聖は戦後に中小ピアノ製造業者が多数出現した要因として、戦争に動員された二大メーカーのピアノ技術者が「復員後、それまでの技術を生かして自分でピアノメーカーや部品メーカーを設立するものや、すでに設立された中小メーカーに就職するものが多かった」ことを挙げ、「戦前ピアノ製造技術（製作・調律、木工、塗装など）を学んだ技術者が数人集まると、ピアノを作ることは簡単」で、ピアノは「それ自体金額がはり、取引は現金または手形で行われるため、資本の回転が早く、元手が少なくても創業が可能」としている（阿部 1997）。

以上のような背景、要因があるとはいえ、ピアノ市場の急速な拡大という事業環境がなければこれほど多くの中小ピアノ製造業者の参入がみられることはなかったであろう。大野木はヤマハ、カワイ以外の生産ウェイトが「昭和 30 年代は 2 割以上に達し、40 年代前半にも 10 数 % を維持した」として中小メーカーの役割を評価するが、国内需要の急速な拡大によって二大メーカー以外の中小製造業者が市場に入り込む余地が十分にあり、技術者数人で開業可能というピアノ製造業の特性によって経営が成り立っていたということができる。

4-3. 激しい販売競争と需要衰退期における急激な縮小

ピアノ市場の急速な拡大とピアノ製造業の特殊性によって急速に増加した中小のピアノメーカーであるが、中小故に資金力が乏しく、独自の販売ネットワークを持たないため、営業、販売面では大都市の楽器商等に大きく依存していた。製品の流通、販売がメーカー主導でなく、流通サイドに主導権を掌握されており、製造業者の多くは納入価格を低く抑えられて、経営的には厳しい状況にあったといわれている。また経営管理の面でも「「ピアノ職人」が会社を設立する場合が多かったため、専門の管理スタッフがおらず、いきおい放漫経営に陥りやすかった」（阿部 1997）とも指摘されている。

国内のピアノ販売は 1980 年にピークを迎え、以後減少が続く。ブランド力もなく、自ら販売網を持たない多くの中小製造業者の経営状態は急速に悪化し、1980 年代には経営破綻に追い込まれたり、受注減により廃業したりする業者が次々と現れるようになった（表 5）。1986 年 9 月にはピアノの量販店で、ピアノの安売り商法でビジネスを拡大してきた東京ピアノ（資本金 1,500 万円、1971 年設立）が倒産し、浜松の中小製造業者にも連鎖倒産が広がった [8)]。

＜表 5 ＞中小ピアノ製造業者の消滅（倒産・廃業等）

年	メーカー
1980	ルビンシュタイン
1981	ローゼンケーニッヒ
1983	ツルタ、トニカ
1985	東海楽器製造
1986	アトラス、東日本、大成伊藤　（東京ピアノ社倒産）
1987	シュバイツァ、フローラ

※筆者作成

中小ピアノメーカーの数は 1960 年代前半頃をピークに減少し、1970 年代には 20 社前後で推移していたが（阿部 1997）、1980 年代からは減少が加速、1990 ～ 2000 年代にも減少は止まらず、2013 年現在では 2 で述べたとおり、わずか 4 社のみが現存（浜松地域での生産は 3 社）している。

5. まとめ

5-1. 楽器産業研究の意義～ユーザーからの情報収集の必要性

本研究は浜松地域における楽器産業、ピアノ製造の歴史を概観し、戦後のピアノ需要拡大期に一気に増加し、需要のピーク時から急激にその数を減らした中小ピアノ製造業者に焦点を当て、その歴史的な位置づけ、役割を明らかにしようとするものである。調査の中で楽器製造業に携わってきた多くの方々にお話を伺ったが、同時に数多くの「証言」を頂いたのが、学校や家庭で楽器に触れ、懸命に楽器の練習をし、演奏に親しんきた「ユーザー」のパーソナル･ヒストリーである。2012 年 10 月の「バンバン！ケンバン♪はままつ」における筆者の報告の後にも、会場に居られた作曲家で本学文化・芸術研究センター長の三枝成彰先生から、ご自身の幼少の頃から現在まで使われてきた様々なピアノの変遷について個人的にお話を伺うことができた。プロ・アマチュアを問わず、音楽、ピアノに親しんでこられた方々にお話を伺えば、「子どもの頃に家で弾いていたピアノ」「自分の家に、あるいは親戚、友人の家にあったピアノ」の話は豊富である。

既に述べたように、あらゆる産業は供給サイドのみで成立するものではない。需要と供給の密接な相互関係及び相互作用によって産業は発展し、歴史的な意味を持つに至る。多くの産業史は供給サイドを中心とした論述が中心となるが、人々が日々の生活の中で使い、接する日用品、嗜好品などの場合には、それを製造する産業の変遷とともに変わっていく人々の日常、生活風景など、個人の「思い出話」から発展したユーザーサイドに関わる情報の収集は、産業史を補完する要素として欠くことのできない作業と思われる。産業が作り出した人々の生活や文化、産業によって豊かになった人々の幸福を論じてこそ、産業史研究のフィールドは一層豊かなものとなり、産業の未来の姿にも繋がる指針ともなり得るのである。

ピアノに関していえば自分がかつて家で使っていたのは「どこ製のピアノだったのか」、「音は、弾き具合はどうだったのか」、「そのピアノは今どうなっているのか」等々。ピアノに限らずあらゆる楽器には豊富なパーソナル・ヒストリーがあることであろう。今回の調査の中で

気付いたこれらの重要な情報はまだ収集、整理共に十分なものではなく、今後の課題である。

5-2. 浜松のピアノ製造業の特徴と中小製造業者の評価

山葉寅楠の尽力により初めて国産ピアノが浜松で作られて以来、100 年以上にわたり浜松は日本のピアノ作りの中心地である。浜松のピアノ製作を担ってきた技術者・職人の多くはごく一部の事例を除き、ヤマハ、カワイという世界的な二大メーカーの技術者か、または両社からのスピンアウト者である。カワイの創業者であり、優れたピアノ技術者でもあった河合小市（1886 ～ 1955）もまたヤマハ（当時は日本楽器製造）の社員としてピアノ製作に携わり、腕を磨いており、彼こそはヤマハ・スピンアウト者の代表格ともいえる。その意味では浜松における楽器、ピアノ製造の「すべてはヤマハから始まった」といっても過言ではない。100 年を超える歴史を振り返れば、多くのスピンアウト者を生んだのは大規模な労働争議や戦争などの苦境を契機とした経営組織の改革、経営全般の近代化、合理化の時期であり、近代的な大規模生産、経営管理への反動が多くの中小製造業者を生み出したともいえる。一方、中小製造業者は事業規模が小さい故に、営業力、販売力の面で十分でないため、大都市部の楽器商などに流通、販売の主導権を掌握され、低価格での販売を強いられた業者も少なくなく、1980 年代のピアノ市場の縮小とともに急速な淘汰の波が襲うこととなった。

小規模なピアノ製造業者が縮小したピアノ市場の中で生き残るためには、調律師などユーザーに近い専門技術者との密接な関係やネットワークをもち、独自の販売ルートを確立するか、あるいは、他の中小製造業者はもちろん、二大メーカーを凌ぐほどの高品質なピアノを作り続けて、市場に確固たる地位を構築することができるか、のどちらかしかない。浜松地域だけで 50 を超える数の中小製造業者がありながら、今日、ピアノ製造業としてはほとんど残っていないという現状をみれば、ほとんどの業者が市場の縮小に耐えるだけの販売力、技術力を十分に備えていなかったと言わざるを得ないのである。

5-3. 今後の展開～楽器・ピアノの街浜松からの発信をめざして

本研究を進めていた 2012 年 4 月頃、浜松市博物館（浜松市中区蜆塚）の太田好治館長（当時）より「1995 年の廃業以来、永くご遺族によって保存されていた大橋ピアノ研究所の工房で使用されていた工具、治具、図面、帳票類など一式の資料が浜松市博物館に寄贈された」旨の連絡を頂いた。このピアノ工房に関わる資料は、長年、ピアノ製造史などの研究者の間でも注目されていた貴重な資料である。（末尾写真資料に大橋ピアノ研究所資料の写真掲載　写真資料 3）

大橋ピアノ研究所を創業した大橋幡岩（おおはし・はたいわ　1896 ～ 1980）は 1909 年にヤマハ（当時は日本楽器製造）に入社し、優れたピアノ技術者である山葉直吉に師事、ピアノ製造の技術を磨いた。その後長く、ヤマハのピアノ作りの中心的存在であったが、大正末期の大争議を契機に 1928 年（昭和 3 年）ヤマハを辞職、その後山葉直吉が創業した山葉ピアノ研究所で「n yamaha」ブランドのピアノの開発、製造に携わるが、戦後は同志とともに浜松楽器工業を創業、「ディアパソン　DIAPASON」のブランドで知られる優れたピアノを生み出した。1958 年（昭和 33 年）には大橋ピアノ研究所を設立、「OHHASHI」のブランドで、ピアノ製作に関する深い知識と高い技術に裏打ちされた高品質のピアノを作り続けたことは有名である。大橋幡岩が 1980 年に死去した後は長男の大橋巌氏が事業を継承していたが、巌氏も 1991 年に逝去され、大橋ピアノ研究所は 1995 年に自主廃業、その後遺族の手によって守られてきたピアノ製作に関わる資料が今回、浜松市博物館に寄贈されたものである。

小規模なピアノ工房がほとんどなくなってしまった現在、これらはピアノ製造の作業現場の様子を伝える極めて貴重な資料であり、また高い技術とともに妥協を許さない厳格な製作作業を続けた大橋幡岩の業績を将来にわたり顕彰するためには、作り上げたピアノとともに作業現場に関わる調査研究を欠くことはできない。浜松に立地する教育研究機関である本学として今後、この「大橋ピアノ研究所資料」に十分な関心を持ち、研究の対象として関わりを持っていくべきと思われる。

尚、2013 年度からは本学文化政策学部、根本敏行教授を中心として学長特別研究「ピアノ工房『大橋ピアノ研究所』のアーカイブ作成のための調査研究」が始められており、資料の整理とともにピアノ工房の研究方法や研究成果の公開方法などを視野に入れた調査研究が行われている。

このほか本学『研究紀要 13』（2013 年 3 月発行）において小岩信治准教授（現　一橋大学）により報告された「楽器産業文化学」研究、あるいは 2012 年 10 月に初開催され、2013 年 10 月にも第 2 回が開催された「バンバン！ケンバン♪はままつ」などの音楽公演とシンポジウム・講演会などを組み合わせたイベントプログラムなど、本学の研究プログラム、イベントプログラム及び研究リソースを連携させ、浜松発の魅力的で価値の高い発信をしていくことが求められている。例えば研究、イベントプログラムを補完し、情報発信のプラットフォームにも成り得る Web サイトを構築し、そこに新たなスタイルの「Web ミュージアム」を展開することなども考えられるのではないだろうか。

地元浜松に立地する楽器メーカーや在住の楽器職人、技術者、研究者など多くの方々の力を借り、いまだ顕在化していない事実や情報を掘り起こしながら、ピアノをはじめ様々な鍵盤楽器を生み出し、100 年以上にわたって楽器、ピアノを作り続けてきた浜松からの「産業と文化に関わる発信」に繋げていくことが必要と考えている。

＜写真資料＞

写真資料 1. エスピー楽器製作所（磐田市豊田）

○エスピー楽器製作所は SCHWESTER ブランドのピアノを世に送り出して来た .
「エスピー・SP」は SCHWESTER PIANO の略 .
発注者への納品直前、完成品を前に，社長でピアノ職人・技術者の岩本良一氏 .

写真資料 2. シュバイツァ技研（磐田市大原）

○シュバイツァ技研の工房内 . 現在は中古ピアノのリペア―業務が中心となっている .

写真資料 3. 大橋ピアノ研究所資料

○大橋ピアノ研究所所蔵の「n-yamaha」ブランドのアップライトピアノ（1930 年製）.
山葉直吉（N.Yamaha）と共に大橋幡岩が作り上げた希少なブランドである .
（現　浜松市博物館展示室）

○浜松市博物館に寄贈された大橋ピアノ研究所で使われていた工具類の数々 .
未整理資料のため、今後の調査が待たれる .

注

1) 明治中期、山葉寅楠を中心に楽器の製造が始められたのは現在の浜松市中区であるが、1 世紀を越える展開の中で楽器製造の拠点は隣接する磐田市をはじめ静岡県西部地域に拡大した。「浜松の楽器産業」と言いつつも実際には浜松市外の製造業者も多いため、それらを総称する意味で「浜松地域」という表現を使用することが適切と考えられる。
2) 山葉寅楠のオルガン「修理」から「製造」への展開、山葉風琴製造所の旗揚げ（1889）の過程については多くの研究があるが、武石みどりは「山葉オルガンの創業に関する追加資料と考察」（2004）において、往時の日刊新聞などの資料に基づき詳細な経緯調査を行い、従来、山葉の伝記やヤマハ社の社史等で浜松に語り継がれてきた「創業のストーリー」を批判的に検証している。
3) 浜松宿成子坂（浜松市中区成子町）にあった鈴鐸山普大寺（れいたくざんふだいじ）は普化宗の寺院で虚無僧寺のひとつ。1871 年（明治 4 年）の太政官布告により普化宗は廃宗となり、寺も廃された。残された庫裡（住職や家族の住居、僧房）を山葉が借り受け、オルガン製造所として使用したものである。現在でもこの普大寺跡一帯は「オルガン山」の通称が残る。このオルガン山至近の菅原町に生まれたのが後に河合楽器製作所を創業する河合小市で、車大工の子であった河合は子供の頃から山葉風琴製造所の様子を覗きに行っていたといわれている。
4) 西川風琴製造所を創業した西川虎吉（1846 ～ 1920）は千葉県君津の出身、後に横浜の西川家の養子となった。西川は三味線製作の職人であったが外国人の居留する横浜という土地柄、洋楽器の将来性に着目して転向した。オルガンの製造開始は 1881 年（明治 14 年、あるいは 1880 年説もあり）で、1884 年（明治 17 年）から量産販売を始めている。西川のオルガンはキリスト教会関係に販路を持っていた（山葉のオルガンは学校や官庁に有力基盤を持つ）。西川と山葉はその後、第三回内国勧業博覧会（1890 年）において共にオルガンとピアノを出品、品質競争を演じたり、音楽雑誌誌上で宣伝合戦をエスカレートさせたりした。西川虎吉が死去した 1920 年、当時の西川楽器はヤマハに吸収合併されている。
5) 日本楽器製造設立後もブランドとしてはヤマハ YAMAHA を使い続けていたが、設立 90 周年の 1987 年に社名をヤマハ株式会社としている。本稿では日本楽器製造 (株)、ヤマハ (株) の時代を通じて「ヤマハ」と表現する。
6) 大量解雇の原因はヤマハのハーモニカ事業がドイツ製品の輸入によって不振となったことによる。1921 年に 600 人以上が解雇されている。
7) 「ピアノ・ブランドとピアノ製造業者の組み合わせ」と表現するのは、ピアノ・ブランドの資料がこの組み合わせを 1 データとして表記していることによる。一つの製造業者が複数のブランドのピアノを製造するケースは多く、また同じブランドながらある時期から別の業者の製造になる場合もあり、その他製造業者自身の社名変更、統合、分裂など様々なケースがあるためである。「ブランド／業者」の形で物品税の納付登録がなされ、ピアノ・ブランドの資料がそれを使用しているためと考えられる。
8) 東京ピアノ社倒産（1986 年 9 月 18 日）の衝撃は大きく、浜松の地元紙、中日新聞が 1986 年 9 月 20 日から 25 日まで 5 回にわたり「激震・遠州楽器産業　東京ピアノ倒産の波紋」を連載している。

参考文献

阿部聖「浜松中小ピアノメーカーの歴史と現状」、常葉学園浜松大学経営情報学部論集第 9 巻、特別号、1997
足立博『まるごとピアノの本』、青弓社、2002
今泉清暉・宇都宮誠一『楽器の事典　ピアノ』、東京音楽社、1982
大塚克美、神谷昌志『はままつ百話　明治・大正・昭和』、静岡新聞社、1983
河合楽器製作所『河合楽器製作所創立 70 周年記念誌』、1997
河合楽器製作所『河合小市から EX へ』、1997
小岩信治「「楽器産業文化学」構築の試み」、『静岡文化芸術大学　研究紀要 13』、2013
前間孝則・岩野裕一『日本のピアノ 100 年』、草思社、2001
大橋ピアノ研究所『人　技あればこそ、技　人ありてこそ』、創英社／三省堂書店、2003
大野木吉兵衛「浜松における洋楽器産業」（機械振興協会経済研究所・浜松史跡調査顕彰会編『遠州産業文化史』、1977）
斎藤信哉『ピアノはなぜ黒いのか』、幻冬舎新書、2007
武石みどり「山葉オルガンの創業に関する追加資料と考察」、社団法人浜松史蹟調査顕彰会『遠江』第二十七号、2004
横浜市歴史博物館・横浜開港資料館『製造元祖　横浜　風琴洋琴ものがたり』、横浜市歴史博物館・横浜市ふるさと歴史財団、2004